

浜田卓二郎氏ヒアリングの趣旨

浜田卓二郎氏は大学卒業後、大蔵省に入省し、将来の次官候補として主計局主査等を歴任した。その後、大蔵省を退官し、80年に衆議院議員に初当選して以来、衆議院4期、参議院1期を務めた。その間、財政、経済、金融・税制問題、年金・医療等福祉、外交・環境等、様々な課題に取り組んでいる。特に、財政金融関連においては、宮澤首相の中心的な政策スタッフとして、政策運営に関わった。

以上のような経歴の浜田氏に、バブル発生の経緯（プラザ合意の金利政策など）、バブルに関連したエピソード（税制など）、バブル崩壊の原因（総量規制や土地税制など）、バブル崩壊後の公的資金注入論争における宮澤首相との議論やエピソード、住専処理の評価、当時の土地取引、大蔵省の官僚構造などに関してヒアリングを行い、バブル崩壊前後の政局、官僚の意思決定構造を考察する。

浜田卓二郎氏略歴

浜田卓二郎氏年譜		関連出来事年表
1941年(昭和16年)	鹿児島県始良郡加治木町で誕生	
1965年(昭和40年)	東京大学法学部卒業、大蔵省入省	
1965年(昭和40年)	大臣官房文書課配属(各局の法令審査)、公正取引委員会出向、新潟県三条税務署長、国際金融局外国為替市場担当、大臣官房秘書課課長補佐、主計局主査(公共事業等担当)、自民党副幹事長等歴任	
1977年(昭和52年)	大蔵省退官	
1980年(昭和55年)	衆議院議員(自民党)当選。以降、衆議院4期。外務政務次官、衆議院社会労働委員長、厚生委員長、法務委員長、自民党副幹事長等歴任	
1985年(昭和60年)		9月―蔵相・中央銀行総裁会議(G5)ニューヨークにて開催。ドル高是正の経済政策協調推進で一致(プラザ合意)
1986年(昭和61年)		9月―経済対策閣僚会議、総合経済対策を決定(内需中心の景気拡大・雇用の安定などにより、経済の拡大均衡をめざす)(約3兆6000億円)
1987年(昭和62年)		2月―主要国蔵相・中央銀行総裁会議パリにて開催。黒字国の内需拡大(低金利政策、為替レートの現水準での安定化を確認(ルーブル合意)。2月―公定歩合引き下げ(3・0%↓2・5%・89年5月まで)。5月―経済対策閣僚会議、緊急経済対策を決定(約6兆円)。10月―大暴落(ブラック・マンデー)
1988年(昭和63年)		7月―BIS中央銀行総裁会議・バーゼル銀行監督委員会「銀行の自己資本比率の国際的統一基準」を決定
1989年(平成元年)		5月―公定歩合引き上げ(2・5%・87年2月より2年3カ月↓3・25%)

1990年(平成2年)		
1991年(平成3年)		3月―金融機関の土地関連融資の総量規制を示達
1992年(平成4年)		5月―地価税法公布・一部施行。12月―景気減速・地価急落に対処し金融機関の不動産融資の総量規制の解除決定
1993年(平成5年)	衆議院議員選挙で落選	6月―金融制度改革法成立。8月―「金融行政の当面の運営方針」12項目を発表。8月―総合経済対策 総額10兆7000億円
1994年(平成6年)	自民党を離党、新生党入党	4月―新総合経済対策決定 総額13兆2000億円
1995年(平成7年)		2月―総合経済対策を決定 15兆2000億円。2月―「金融機関の不良債権問題についての行政上の指針」を発表
1996年(平成8年)		1月―阪神・淡路大震災。3月―東京共同銀行が営業開始。6月―「金融システムの機能回復について」を発表。12月―6850億円の財政資金投入を含む住専処理法案決定
1997年(平成9年)	新進党解党後無所属	6月―住専処理法など金融6法成立。11月―橋本総理「日本版ビッグバン」を指示
1998年(平成10年)	参議院選挙で埼玉選挙区から立候補し、当選。参議院行政監視委員長。	7月―アジア通貨危機。11月―三洋証券会社更生法の適用を申請。北海道拓殖銀行が北洋銀行への営業権譲渡を発表。山一證券大蔵省に自主廃業を申請
1999年(平成11年)		10月―日本長期信用銀行の特別公的管理を決定、初の民間銀行国有化。12月―日本債券信用銀行も国有化
2000年(平成12年)	弁護士認定を受ける	3月―金融再生委員会が大手15行の経営健全化計画を承認(7兆4592億円の資本注入)
2005年(平成17年)	弁護士法人浜田卓二郎事務所設立、同事務所代表社員に就任	

第2部 オーラルヒストリーインタビュー⑤

浜田 卓二郎 氏（元衆議院議員）

日時 2010年2月3日（水） 13時～15時

場所 弁護士法人浜田卓二郎事務所

（ニューオータニビジネスコート2801）

【原田】 80年代を通して宮澤喜一総理のブレーンとして活躍された浜田先生のお考えを、バブルの前後に起きたことと関連してお聞きしたいと思います。

【浜田】 私にとっても、50歳になる1ヵ月前に宮澤出馬演説を私の手で、あるいはまた、小沢鋭仁君（現在民主党代議士）といった今環境大臣になつていますが、彼が私の政策スタッフの取りまとめを10年やりました。後でもまた小沢の話が出ますが、小沢君の手元で全部宮澤政権構想もできて、出馬演説もできて、あとは出馬声明をするかどうか（宮澤は）迷っていたんです。

当時、加藤紘一さん、僕の兄貴分ですけれど、それから斎藤邦吉さん（元厚生大臣、自民党幹事長）が座長で、2人は反対していません。宏池会の空気が二つに分かれていたのを、9月4日の夜に（宮澤は）決意して、そのとき私はすぐに呼び出されて、自分が決意したことを斎藤邦吉さんに伝えろと言われて私邸に伝えに行きました。彼も演説するというので、邦さんの注文で演説草案を私が手元で書いて届けて、その夜中に私は倒れちゃったんです。だから、宮澤内閣発足のときは病院にいましてね。人の運命とか、めぐ

り合わせとかいろいろ考えました。それからいろんなことがあったわけで、自分の生きている間にその間の経済政策の変化とかいろいろなことを、一度は記録に残しておきたいなと「思っていました」。

バブルの兆しと崩壊の実感

【原田】 まず一般的な質問ですが、80年代を振り返って、景気回復からバブル状態になっていく兆しは、いつ、どこにあったのか。浜田様としてそれをどういうふうにお感じになりましたか。

【浜田】 私は、大蔵省時代、71年（昭和46年）の夏に税務署長を終わって帰ってきて、外為会計を担当した時期があったんです。そうしたら、その担当になった翌月にニクソン声明（8月15日）がありまして、円がスミソニアンレートに替わると（スミソニアン協定によってドルと各国通貨の交換レートが決まったのは同年12月）。これもどこかで語らなければいけないと思うんだけど、マーケットを2週間開けっ放しにした裏話があります。私は外為会計担当ですから、当時は自社対決時代で、社会党、共産党のいろいろな追及に遭ったりしながら、まことにしんどい思いをして乗り切った記憶があるわけです。それからスミソニアンレートから離脱して、円がフロートするわけですね。

そのあと、円がフロート（変動相場制）に移行した（73年2月）。そのあとの為替の出来事としては、85年でしたかね、いわゆるプラザ合意というものがあつて（9月22日）、これで2000円台だった円が一気に180円に上がった。それからどんどん上がって行つて、1年間ぐらいでたしか110～120円レベルまで高くなっ

た。それが結局、内需拡大策の継続につながった。円高の他国への影響、特に米国等に及ぼす影響を回避したいということ。これは中曾根（康弘）内閣ですよ。その大幅な金融緩和、景気拡大策がバブルの引き金になっている。これは世情言われている話です。

私はその頃何をしてたかといいますと、87年（昭和62年）、ブラザ合意の2年後に外務政務次官に任命されて、当時は宇野（宗佑）外務大臣（のち首相）と政務次官は1人だった。今のように政治家がやたら威張らない時代、役人さん主導の時代でした。これは昭和62年ですから、昭和の終わり頃ですよ。昭和64年が平成元年（89年）になるわけですからね。それで私は、それから一年半ぐらいいは、一年半でもないか、丸1年ぐらいですか、外務政務次官として各国を飛び回ったので、日本にあまりいない時期があったんです。

それで、その前後だったと思うけれど、例えば85年のブラザ合意の2〜3年あとだろうと思うんです。私の大宮の後援会長さん、面白いお名前で阿戸さんとおっしゃる。日本人ですけれどね。駅前で小さな不動産屋をやっていたんです。いわゆる宅建業者です。その方がたまたま、外務政務次官になる前でしょかね、私の家をお訪ねになって、「先生、銀行がおかしいですよ」と言うんだよね。要するに、自分みたいな小さな構えの不動産屋に幾らでも金を貸すと言ってくる、というわけです。しかも、「このゴルフ会員権を買いなさい」とか「この株を買いなさい」とか、支店長が言ってくる。

大宮は私の選挙区外だったわけですが、私の資金団体の後援会長になるぐらいですから、今思えば土地では名士の1人だったんだと思いますけどね。「どうもおかしいよね。俺のところまで、この

株を買え、この会員権を買えと言って、融資付きで支店長が勧めに来る「っていうわけですよ。」「こんなこと、初めてですよ」という話を聞いたのが87年頃かな。そうすると、振り返ってみると、ブラザ合意の1〜2年あとということで、超金融緩和策がとられ始めた頃だと思っんですね。

それでびつくりしたのは、まちの不動産屋ですから、商いは年間せいぜい5〜6億ぐらいあればいいぐらいの規模のお店です。200億の資金を貸し付けられたと言っんです。「どうして200億円になったの？」と聞いたたら、ある株を勧められて買いました。そうしたら、銀行さんの言う通り、上がりました。そうしたらまた支店長が来て、「その株を担保に入れたら、また貸します」とおっしゃると。それがずっとうなぎの重箱のように何重にも重なっていつて、200億だと言っんです。僕もさすがに驚いてね、「それはちょっと普通じゃないよ。あなた、気をつけたほうがいいよ、そんなに借りて。担保はどうするの？」と言ったら、「担保は、何段重ねにもなっていますからあるんです」と言うんだね。ああ、そういう仕組みで金を貸せるんだ、と思った記憶があるんです。

それが、外務政務次官でしょっちゅう外国へ行っていましたから、帰ってきてはいろいろそういった話を聞かされて。90年（平成2年）、この頃がバブルのピークでしよう？ たぶん。

【竹中】 そうですね。89年末が、株価が最高ですから。

【浜田】 3万9000円。

【竹中】 はい、3万9000円です。

【浜田】 総量規制が90年3月にとられているはずですね。だから、たぶん総量規制がとられたあとだな、その阿戸さんがやってきて、

「先生、なんとか銀行と話してくれ」と、今度は逆の話なんです。「なんで？」って聞いたら、全部が担保割れなんです。積み重ねたわけでしょう。その株価がピークを過ぎて、今度はドーンと下がり始めていたわけですね。そうすると担保割れになるじゃないですか。その頃の担保掛け目はたぶん90%とか、めちゃくちゃ高かったんですよ。それで、ああ、そうか、これでこのいわゆる経済拡大は終わるんだな、というふうに思ったですね。

だから時間経過で見ると、たぶんそれは総量規制が始まった直後ぐらいの話だろうと思うんです。だから、僕に言わせれば、大蔵省の総量規制が遅過ぎたんですよ。あのときとった政策は総量規制、これは銀行局長通達で、それからもう一つは、国土利用計画法による土地取引価格の届出制を採用した（第23条 土地に関する権利の移転又は設定後における利用目的等の届出）。それから、土地の重課制度、39%まで譲渡所得課税を重課（所有期間5年以下の土地を個人が譲渡した場合、譲渡益に対して所得税30%と住民税9%の合計39%を追加課税）したわけですね。これがいわばバブル潰しの三種の神器になった。

それが始まったのが、90年（平成2年）3月の総量規制からということになりますから、僕に言わせれば、その何段重ねの担保が進行しつつある時に、やっぱり加熱だということで抑制策に転ずべきであった。だから、僕はその後の国会の議論では、バブルの発生を放置して、政府の抑制策が後手に回った。これが一つの大きな原因だと。

もっと根本的な原因は、銀行の保護行政ですよ。私は65年（昭和40年）に大蔵省に入ったわけだけれど、大蔵省に入って、銀行局が

何をやっているかというのを知ってショックを受けた記憶があるわけね。昭和40年頃ですから、店舗行政しかやっていないわけです。それと、金利の自由化ができていませんでしたから、貸出金利も預金金利も固定制です。そうすると何でサービスするかというと、ティッシュペーパーなんですよ。

銀行局の銀行課は4階の片隅にあつただけけれど、銀行課で何をやってたかという、「ティッシュペーパーを何個まで」とか……（笑）。

【原田】 貯金箱やカレンダーも規制していましたね。

【浜田】 そうそう。僕が一番覚えてるのはティッシュペーパー。あと、店舗はどこに置くと。規制されると、心理的にはこの規制の中で最大限を取ろうとするわけです。店舗の設置申請を銀行課でやってたわけでしょうね。行政指導だから、正式な認可とかなかじやなかったと思いますけれど。競争して、いいところに出店しようとする。そうすると、大通りの四隅には別々の銀行の支店ができて、しかも周りの建物に比べるとめちゃくちゃ豪華だとかね。要するに競争に慣れていないから。規制されているなかでやれることを際限なくやるわけです。それが銀行のビヘイビアだったのよね。

そこに、中曽根内閣の超金融緩和策が重なってきたものだから。僕は、金融緩和策だけじゃなくて、銀行の保護行政のツケが来ていると（感じた）。「ノーパンしゃぶしゃぶ」なんていうのはその頃起きた話です。幸い僕は辞めていたから、行ったこともないし、どこにあるかも知らないんだけど（笑）。まあ、しかし僕の大蔵省時代なんて、予算編成で公共事業の予算査定をしているときに、まあいろんな料理屋からすっぱんの鍋が届いたりしたね。これも考えた

ら癒着だよ。それは余分な話だけれど、当時の銀行行政のツケが、この超金融緩和策に重なったというのが、そのときの私の感想です。

だから、阿戸さんという固有名詞に関連してはつきり、ああ、なるほど、こういうことが起きているんだと感じた。それは、阿戸さんが最初に言ってきたとき、これが87年ぐらいかな。それから、87年に私が外務政務次官になって88年、まあ90年直前ぐらいに担保割れが徐々に始まった。株価のピークはいつになりましたっけ。

【竹中】 89年12月29日です。

【浜田】 ああ、そうか。じゃ、そのあとだね。バブルの大きくなった状況というのは、私の認識の中にはそういう形でありますね。

アメリカと日本の金融緩和策

【原田】 バブルは、おっしゃられるように、いろいろな要因で起きたのだと思いますが、経済学者などは、原因として長期の金融緩和を強調する人が多いと思います。

このときに、宮澤蔵相（86年7月～88年12月）が国際協調のために金融緩和を続けなければいけないとおっしゃっていたという別の方の証言もありますが、そういうことはあったのでしょうか。

【浜田】 アメリカは、日本の金融緩和策というものを非常に多とっていました。だから、日本は内需拡大を続けてくれ、というのはたぶん……。当時は竹下（登）内閣でしたが、私は外務政務次官をやっている、国内の情勢からしばらく離れていたということはありませんが、アメリカ通と称する人たちが、それを翻訳するんだよ。そ

れで、テレビなんかでも言うわけですよ。

あとの話になるけれど、ゼロ金利をいまだ日本は離脱できていないでしょう。僕はずっと、機会を捉えて早く離脱すべきであると（言っていた）。あれを完全に邪魔したのは、当時の（ローレンス・）サマーズ（財務長官）とか、それと仲の良い大蔵省高官だよ。チャンスがあるときに日本はゼロ金利から離脱すべきだということを僕は言い続けていたし、日銀総裁も当時そういうことを言っていたけどね。

僕は、アメリカの注文というのは直接聞いたり伝えたりという立場ではなかったから、僕自身の体験としてはありませんけれども、推測するに、緩和策を続けたいと「いうことはあっただろうと思います」。

それで、宮澤の売りはハーバード・イングリッシュですから。英語っていろんな種類があるんだね。僕は、宮澤政策の「資産倍增論・生活大国」というものをサイマル（・インターナショナル）に頼んで英訳したわけ。これはみんなで議論した議論を、小沢鋭仁君に直接筆を執らせたもの。それを英訳して宮澤に見せたら、「この英語はダメだ」と言うんだ。サイマルの英語じゃダメだった（笑）。英語には種類があるというのを、そのとき初めて知りました。だから、それは彼のアメリカリットというのは正確にたくさんあったと思うんです。ここは予測の範囲を出ませんが、たぶんアメリカの内需拡大策持続要請というのはあったと思うし、それを一番聞きやすい立場に、英語力も含めていたのは宮澤だ、というのは事実でしょうね。

バブルに対する対応

【原田】話を戻して、すみません。バブルのときに、浜田先生も「何かおかしいな」と思ったということですが、政府、日銀、政治家で、「これはおかしいから、早く何とかしなければいけない」というお話をされた方は、ほかになかったでしょうか。

【浜田】僕は当時、生意気な議員でして、「若手のホープ」なんて言われて舞い上がっていたからね（笑）。「自由社会フォーラム」という政策集団を結成していました。高村正彦君（元外務、法務、防衛大臣）、谷垣（禎一）君（現自民党総裁）、それから大島（理森）君（元農林水産、文部大臣、現自民党幹事長）、今、みんな要職に就いているけれど、そういう人たち20人、僕以外が19人で若手議員の会を結成して、そこでいろいろな提案をしたりしていました。スタッフは、小沢君の下に14、15人いたのかな。だから、小沢鋭仁君に主宰させたスタッフ会議、そこに議員も参加してというような形でやっていました。

そこでは、この異常現象をどこでどうするのか、という議論はかなりあったような記憶がありますけれど、誰が何を言ったか。だいたい私が代表して記者会見をしたり、あるいはテレビに出たりしていました。あの頃はテレビの常連でしたから。ほかの議員の議論というのはちょっと記憶にありません。ああ、田中秀征（元経済企画庁長官）ぐらいだな。田中秀征は、「おかしいよなあ」なんていう話を雑談でしたような記憶があります。田中秀征も同じ宏池会にいましたから。

【原田】何かおかしいとは思いつつも、それで具体的に何とかする

ということまではいかなかったということですか。

【浜田】バブル拡大の過程ではね。収縮の過程で私はいろいろな動きをするわけですけど、拡大のときは、外務政務次官でいたこともあって……。社労の委員長になったのはいつかな。91年、社会労働委員長です。それで社会労働委員会が労働委員会と厚生委員会に分離されて、8月から厚生委員長になっていますね。91年、平成3年です。だから、私の記憶は、拡大時はあまりありませんね。

不動産バブルと税制、総量規制に関する銀行局長通達

【原田】不動産バブルの発生には税制が大きく影響していて、高所得者あるいは相続税対策でも、たくさん借りて資産を減らすとか所得を減らすとかすれば得をする、という税制になっていたことでもあります。そういうことも、影響したというようにお考えですか。

【浜田】たしか中曽根内閣のときに所得減税をやっていますよね。法人税減税もやっていますよね。ただ、あれは僕の持論にかなっているものだから。

僕は、消費税導入については、死んだ大平（正芳元首相）さんの一般消費税導入論の最初から最後まで、ずうっと賛成論で来たんですよ。先輩議員に「おまえ、バカか」と言われながらね。最後に売上税では戦犯指定を受けてね。百貨店協会（後述の清水氏は百貨店協会ではなく日本チェーンストア協会会長）の何とかという人に、中曽根康弘はA級戦犯（当時の朝日新聞記事では中曽根氏は「超A級戦犯」となっている）、山中貞則（元通産大臣、自民党税制調査

会会長)はB級戦犯で、浜田卓二郎はC級戦犯だと。C級戦犯は10人ぐらいいるんだよね。僕はその筆頭なんです。それで、あれ、何百万枚も全国にビラをまいたんですよ。ライフコーポレーションの清水氏だ。清水信次氏(ライフコーポレーション会長兼CEO)だ、あの野郎(笑)。

だから、僕自身の持論としては、消費税にもっと移行すべきであるということだった。所得税の累進制はきつ過ぎる、相続税もきつ過ぎる、法人税も高過ぎる、というのが持論だったものだから、中曽根内閣の政策は(持論にかなっていった)。当時殆んどおつき合いはなかったけれど。今、僕の家内(浜田マキ子)と親しくしていただいて、僕はあまりつき合わないんだけど、可愛がっていただいているから悪口を言うのは悪いけれど。派閥ってそういうものなんですよ。宮澤が中曽根嫌いだと、僕は宮澤派だから中曽根嫌いである(笑)。

田中角栄(元首相)が宮澤を大嫌いなんです。僕は新潟で税務署長をやったし、角さんに可愛がられていたから、「なんとか宮澤内閣をつくりたい」と角さんにいつも言っていて、「それだけはダメだ」と。派閥ってというのは、そういうところがありましてね。

それにしても、中曽根はよくやるなと思っていたのが、プラザ合意以降の……。だから、かえってそういう意味で危機感が薄かったのかもしれないよね。ただ、異常性というのは、個別の身近な存在で感じていましたね。

【竹中】 阿戸さんが「何とかしてくれ」と言いに来たときに、何かなさったのでしょうか、下世話な話ですが。

【浜田】 「それは無理だよ」って(笑)。「あんた、支店長の勧めに

応じて買ったというだけでね、買ったのはあんただし、担保に入れたのもあんたなんだから、これは政治家が横から物を言ったって変われないよ」と。それに、そのとき全体が縮み始めていましたから、そういう時勢の中でどうしようもない、ということでした。

その後、彼は駅前の土地も店も売り払って、一時姿を消していましたけれど、まあ実業家というのはしぶといもんですよ、いま復活して頑張っていますよ。

【原田】 ああ、それは立派な方ですね。

【浜田】 立派な人ですよ。

【原田】 やくざは、金を借りると支店長にペンツを送ると言いますね。そうすると一心同体になって、「返せ」と言えなくなるというのですが、やくざではないから、そういうことはしておられなかったのでしょうか。

【浜田】 まあ、あれはやくざじゃないね。僕はやくざに惚れられて、応援するということでくつついて歩かれて迷惑したことがある(笑)。だから、その膨張過程でのそのあたりの僕の危機感というのはちよつと……。

僕は当選して何をやるかと考えたときに、1に外交をやりたかったんです。だから外務政務次官をやった。それから2に、社会福祉が日本の最大の問題だと思っていたから、福祉をやりたい。だから、社会労働委員会と外務委員会に属した。財政金融は当然の僕の基礎・基盤という意味で、そういう意味では委員会にも属していませんでした。ただ、党の税制調査会では、消費税導入論も含めて絶えず論陣は張っていましたからね。

【竹中】 今もお話にありましたが、バブルがはじける3本柱の一つ

が、90年3月に導入された例の不動産融資の総量規制という銀行局の通達です。この通達が出された経緯について、何かご存じのことはおありですか。

【浜田】 いや、私は直接タッチしていませんね。ただ、拡大策が続き過ぎる、長過ぎる、もうピリオドを打たなければいけない、という問題意識はこのあたりずっとありました。自由社会フォーラムを通じてそういう政策提案をしたかどうかちょっと記憶がありませんが、もし機会があったら、小沢鋭仁君のほうが正確に記憶しているかもしれません。当然、バブルを大きくし過ぎた責任はそこにあると思っていますし、当時もそういう意識はあったと思いますね。それをどういふうに行動したかというのは、ちょっとあれですけれど。

【竹中】 当時、海部（俊樹）首相が橋本（龍太郎）蔵相に、高騰した土地価格を下げる策は何かないかということをやったので、こういう規制が実施されたと研究者あるいはジャーナリストのあいだで言われています。地価の高騰という問題が、89～90年あたりから新聞報道などを見るとかなり大きな問題になってきています。サラリーマンが年収の5倍で家を買えない、持ち家を持ってない時代になった、という話がさんざんされていたのがこのころだったと思います。当時、自民党の中で、そういうことに関して議論が行われたという印象が残っていることはありませんか。

【浜田】 そうですね、自民党の税調でバブル抑制策の税制の議論をやった記憶は、私はないですね。だから、これは党税調から上がっていった話ではなくて、政府税調ないしは当時の大蔵省、経企庁を含めた政策当局の判断だと思っていますね。

ただ、総量規制が取られたときの私の感想としては、ああ、やつとそこに転じたかと。だから、もつと前に転ずるべきだという意識はずっと持っていたと記憶しています。

総量規制の解除

【竹中】 そして、そのあと、91年12月に総量規制が解除されますが、解除されたときのことで何か印象に残っていることはありますか。

【浜田】 ああ、それは私が主導したんですから。

【竹中】 そうでしたか。それは失礼いたしました。

【浜田】 いやいや。ちょっと記憶をたどってみると、91年9月6日に、さっき言った出馬声明を宮澤が出して、91年11月に宮澤内閣がスタートするわけです。ところが、私は9月6日の2日前の9月4日に大動脈乖離を発症して、慈恵医大病院に入院したわけですね。「1年入院しろ」と言われました。よく死ななかつた。血管3層のうちの2層がやぶけたわけです。

当時、携帯電話がないときですから、どうして聞けたのか。9月4日の夜、宮澤が決意して、それを斎藤邦吉に、宏池会の座長でしたから伝えて、斎藤邦吉さんの演説を僕の手元で書いて夜中に届けて、帰って来て発作が起きて、慈恵医大に担ぎ込まれた。集中治療室で宮澤から電話を受けるわけです。それがよくわからないんだけど、「君のやることはもうやってもらった。自分もやつと決断がついて、これからは俺が戦うから、おまえは寝てろ」って（笑）。

そうしたら、そのあと田中秀征から電話がかかってきた。小沢君

の手元でほとんど書き上がっていた「資産倍增論・生活大國」という宮澤政権構想は、宮澤さんに呼ばれて、浜田君がここまでやっていくから、全部完成してくれと言われた。だけど読んでみたら、これは友情だよな、浜田さん、手直しすることはないから。そのまま使うから、って言われたのを覚えてるんですけどね。

それで、1年入院しろと言われたんです。ところが、1年入院していたら政治家として終わりだからね。入院して1ヵ月後の10月5日に、私は50歳になりました。これからですよ。それで、医者と喧嘩して12月に仮退院したんです。11月に宮澤内閣がスタートしているんですから、そのスタートした直後だね。

それで、そのときまっすぐ官邸に行っただけです。何を言ったかという、「まだ総量規制をやっているんですか。まだ国土利用計画法の届出制をやっているんですか。まだ土地重課をやっているんですか。もう景気は落ち込み始めていますよ」と。

宮澤さんも、僕に言われてパツと判断するぐらいならもつと先にやればいいのにね、「そうだ、君、すぐ公文君に」。公文（宏）君（現在女子学院理事長）というのはどうしてだろうな、当時、国土庁の次官でしたよ。総量規制の所管は銀行局長通達ですよ。

【竹中】 そうです。

【浜田】 なんて国土庁が絡むんだらう。

【竹中】 国土利用計画だからじゃないですか。

【浜田】 そうじゃなくて総量規制よ。すぐ外すと。その外す声明文を僕と公文さんと書いた記憶があるよ。それで、直ちに記者会見して総量規制を外した。それで公文さんだったのかな、取りまとめがね。僕は一緒にその記者会見の発言要旨を書いた記憶がありません。

す。

それで総量規制は外れた。だけど土地の重課はずっと残ったよね。外さなかったね、これは。大蔵省というのは本当に頑迷なんだよね。それでも、総量規制撤廃と届出制の撤廃はできた。だから、僕が病院を出てきて最初の仕事がそれでした。すぐに官邸に行っただけを覚えてる。

株が危ない

【浜田】 その次に、二つの規制を外したあとに官邸に行って、「株が危ないですよ。だから、景気対策を早急に打ち出すべきだ」と。それも株価の動向から、大蔵省内で証券局長にいろいろ議論させるべきであると。松野（允彦）さんが証券局長でした。いい人だけだね、わかりは悪いけども。

宮澤も宮澤なんだよね。総理大臣でしょう。総理大臣なんだから、自分でパツとインシアチブをとってやれば政策転換なんかできるよね。なんで僕をお使いに使ったのかね、まず「松野君を説得してこい」と言うわけですよ（笑）。変な話よね。

それで、松野証券局長、それから、内田（輝紀）が証券局の総務課長だったかな（内田氏は当時東京証券取引所監理官兼証券局担当審議官）。今は弁護士仲間と親しくやっていますが。（私はそこで）

「株価の動きがおかしい。だから、マーケットから警告を発するべきである。つまり、あなたから省内で政策転換の決議をすべきである。これは宮澤からの伝言だ」と言っただよ。

そうしたら、何と言ったと思いますか。「株に政治家が口を出す

と余計悪くなるんだ」と言うんだ。こっちは真面目に言っているのにね。それで、そのときに、幾らだったかな、「1万9000円の壁があるから、浜田さん、大丈夫です。この壁から下には下がらない」と言うんだから（日経平均株価は92年4月1日、約5年3カ月ぶりに1万9000円台を割り込んだ）。妄言だよ、これは。経済政策史上に記録すべき妄言だよ（笑）。僕は「松野さん、壁を見せてくれ」と言ったんだ。「いや、でも、こんなときは政治家は騒がないほうがいいんです」と言う。まあそういう時代ですよ。やっぱり役人さんの圧倒的優位時代だからね。僕の出馬のときのスローガンが、「官僚をコントロールできる、官僚に対してもっと国民の立場に立った発言ができる政治をつくろう」というものだったんだから、絶対に官優位ですよ。そういう時代だからね。

松野さんがそう言うから、それを総理に伝えたら、これもまたおかしいんだね、僕の記憶違いじゃなかったら、「松野君がダメなら、保田〔博〕君のところへ行つてこい」と言うんだよ。保田さんは次官ですよ。松野さんにあしらわれたうえにさ。僕があしらわれるというのは、宮澤があしらわれるという話だからね。松野さん、一体どういう感覚だったのかねえ。

しょうがない、僕は何の立場もないけれど、総理の伝言を持って来ましたよと言って保田さんのところへ行つて、「景気政策の転換を図らなきゃダメだ。総量規制も効き過ぎて、もうどうしようもない状況になっている」というような話をした記憶があります。しかし、政策は変わらなかった。総量規制と土地取引の届出制は外れたが。

だから、総量規制と土地取引の届出制を撤廃したことが政策転換

の合図、というふうに宮澤は思っていたんでしょね。あと、何をやるかといったって、今の議論を聞いていてもわかるように、公共事業費を積み増しするとかその程度の話しかできないわけだから。官僚さんの意識転換というのは、意識だけ変わったって、じゃ、すぐにどの手を打てるのか、という話になりますよね。だから、総量規制の撤廃から、本来ならば、株価対策といったら金融の緩和とかそういう話になるはずなんだけど、そこまで踏み切るのは遅れたんですね。

【原田】 宮澤総理には、財政・金融両面から転換しようという気持ちは、91年の時点ではなかったということですか。

【浜田】 いや、そのあとの話があるんですよ。

公的資金を入れなかったのか（1）

【浜田】 そのあとの話はね、私は仮退院をして、すぐに総理の官邸に行つて、撤廃の進言をしましたよね。そのあと、景気対策の転換はなかなかできない。（実際に）できなかったのかなあ。翌年になって、僕は小沢鋭仁君に検討させて、10兆円の公的資金注入案というのは（出しました）。これは僕が入省した年（65年）は、田中大蔵大臣が、山一に対する特融をやった年なんです。僕の頭には日銀特融というのがあったから、不良債権という言葉が当時あったかどうかあれだけれど、要するに銀行の資産劣化に対して公的資金を入れるべきであるという議論を、自由社会フォーラムの中ではだいぶやっていたわけです。それで、小沢鋭仁君にいろいろなヒアリングをさせたりして、10兆円という提案を出したんですね。それを総理

には届けてあったわけですよ。10兆円の公的資金注入案です。

そうしたら、その年、92年8月に（自民党の）軽井沢セミナーがあった。それで、軽井沢セミナーのあとの記者会見で、宮澤が「公的資金注入の用意あり」という発言をしたわけです。当時の日銀総裁は三重野（康）さんで、三重野さんもそれに呼応して「日銀もその用意あり」ということを言ったんです。特融の用意ありと。

じゃ、なぜ実現しなかったのか。そこもまた宮澤の不思議なところなんですけど、それから銀行の専務クラスを中心にした検討委員会ができたんです。それで、僕とよく連絡を取っていたのが1人いるんです。何信託だったかな、住友信託だったかな、その専務さんで、会の状況を（知らせてくれた）。要するに公的資金注入を言いながら、その必要なスケールとか、それ以前のやるかやらないかの議論まで、そういう機関に宮澤はゆだねちゃったのよね。そうだと、大橋さんという人。生きているかな。住友信託か何かの専務です。彼が僕にいろいろな問題意識を吹き込んでいた（大橋宏。『犯意なき過ち』「2000年9月、日本経済新聞社、p.11」によれば当時住友信託銀行常務。のち同行副社長を経て東京スター銀行頭取などを歴任）。

そうしたら、途中で大橋さんが報告にやってきて、「先生、これ、ダメになります」と言うんだよね。議論が前に進みませんと。どうしてだと言ったら、大蔵省なんです。いや、これ、本当かどうかわかりませんよ、大橋さんの報告だからね。要するに、公的資金を入れると責任追及が始まると。それはそうよね。現実にはそう運んだわけだからね。だから、今は時期尚早。もう少し資産価値の値上がりを待つべきであると。その頃は抑制策は外したという意識でしょう

から、拡大策を明確にとったかどうか私には記憶はないけれども、政策としては拡大局面に入っているわけですよ。だから公的資金を入れる前に、もう少し銀行の資産基盤の回復というか、担保の資産価値上昇というのか、そういうものを見極めるべきだ、という結論で終わっちゃったわけよ。

だから僕は、総理とは何だと（思うわけです）。軽井沢セミナーというのは、民間人を入れた自民党の政策研究の場ですから、その延長線上というのがあって若干軽いかもしれないけれど、総理の考え方として表明して、日銀の三重野さんもそれに呼応したんですよ、僕の記憶では。だから、僕はこれで事は成ったと思っていた。そうしたらなんのことはない、今度は民間金融機関が集まっている議論するという話になって、腰砕けだよ。

【竹中】 10兆円の日銀特融によって不良債権の処理を進める案というのは……。

【浜田】 僕の私案という形です。

【竹中】 浜田先生のご提案というのは、先生が総理に直接なさったわけですか。

【浜田】 そう、直接した。

【竹中】 執務室で進言されたわけですか。

【浜田】 そうそう、官邸で。

【竹中】 総理はそれに対してどのような……。

【浜田】 それは軽井沢セミナーの前のいつだったか僕は記憶していないけれど、僕は軽井沢セミナーに出席していて、総理が記者会見で「公的資金注入は必要だ」という発言をしたときに、ああ、事は成ったなと思っていたんだね。それで、日銀総裁の三重野さんも反

対ではなくて、自分も同じ考えであるということを記者会見で言っているわけだから。それは記録を調べてもらおうというと思うんだけど。

だから、総理と日銀総裁がそういう対応であれば。ただ、僕らが組み立てた政策だから、その10兆円規模というのも小沢君の手元で計算させた規模だから、よく解釈すれば、総理はたぶんもう少し積み上げが必要だと思ったんだと思うんだよね。銀行の実務家に自分のところの資産査定をさせて、必要資金の積み上げをさせるというのが、その研究機関だったと思うんだけどね。

【竹中】 その研究機関というのは、ごくごくプライベートというか、内輪的に研究させたという感じですか。

【浜田】 いや、それは実施を前提としてやらせたと僕は理解しているけれどね。

【竹中】 それは、総理がそういう指示を下されたということですか。

【浜田】 そうでしょう。総理が、大蔵省を通じてやったかどうかは別にして。その経路は僕はちよつと承知していませんけれど、でき上がった機関については承知しているわけよ。その有力メンバーの1人が、たしか当時住友信託の専務だったと思うんですが、大橋さんという方でね、僕は進捗状況が心配だからこつちからも連絡を取っていた。そうしたらだんだん雲行きがおかしくなってきたいて、最後は「時期尚早」というような結論で見送ったんだね。

【竹中】 このとき、また別の話として、8月に入りまして株価の下落がとまらない。先ほどの1万9000円の壁どころではなく、1万5000円、1万4000円になんなんとしていくという状況に

なりました。それで、宮澤総理がこれに対して非常に危機感を持たれて、お休みを取って軽井沢に行かれていたんですが、当時、大蔵省の中島（義雄）さんが秘書官だったそうですが、中島さんに対して、「東証を一時閉鎖してはどうか。それで公的資金を投入すればいいのではないか」という指示を下された。日本経済新聞が00年頃にバブル特集を組んだときに、「いや、自分はそういうことを言ったんだ」という発言をされています。

【浜田】 宮澤さんが？

【竹中】 はい。

【浜田】 中島とは、東大時代から僕は仲が良かったですよ。今は大蔵省ではすっかり悪人にされちゃったけれど、そんな男じゃないんだけれどね。彼は、江田（五月、現在参議院議長）が駒場の学生運動の委員長をやっているときに副委員長をやっていた。それで1年停学処分になって、本郷の法学部に1年遅れてやって来たわけだね。それで、まあ器用な男でね、反体制の権化みたいなことを言っていたのに、見事にさっさと大蔵省に入ってきてちゃってね（笑）。「おまえ、何だよ」と僕は言った記憶がある。

ところが、そのあとずっと僕のボストのあとなんです。税務署長も、新潟の三条税務署長で僕のあとだったし、戻ってきて僕は秘書課の課長補佐に、その前に外為をやった円の切り上げを経験したけれども、そのあと秘書課に移って、その僕の秘書課の後任が中島義雄。僕はそのあと主計局に行つて主査になった。最初にやった仕事は財政危機宣言ですよ。今後5年か10年で国債累積100兆という数字を僕の手元で出した。そのときの主税局の相方が田谷（広明・元東京税関長）という男です。こいつも悪者にされて。僕の友

人たちはみんな悪の権化みたいにされちゃった。田谷なんて優秀な男だったよ。僕は主計局で歳出をやるから、おまえのほうで歳入見通しを出してくれということ、非常に大胆だし、ポイントは押さえるしね。それで2人の合作みたいな格好だった。

そのときの主計官が場の場（順三・元内閣官房副長官、内閣内政審議室長、国土事務次官）さんなんです。熊本県の総務部長から帰ってきて、主計官になった途端に、ご丁寧に網膜剥離を起こして入院しちゃったんです。完成品をつくるのは主計官の仕事だからね。僕は田谷と相談して、歳入見通し、各局から歳出見通しを出させて、5年ぐらいいで100兆円の国債累積というのを出した。それを出して行く過程で、しょっちゅう虎の門病院に行ったら、的場さん、こんな顔をして（右に首を傾け）、こっち側しか（左上の方向を指し）見ない（笑）。それで説明して、主計官の了承を取り付けながら、「財政収支試算」というものの第1号を僕の作成で出したんです。そのあと、当時は大平大蔵大臣だから、風呂敷包みに資料をいっぱい入れて、「なんでこんな無責任な数字を出すんだ」とか予算委員会や大蔵委員会で叱られながらやった。それが一般消費税導入のキャンペーンの始まりなんですよ。

中島義雄から田谷に話がちよつとそれちゃったけれども、中島義雄は宮澤内閣の秘書官になって、僕のはうもやや健康を回復してから副幹事長になりました。そのときの幹事長が、あの喧嘩上手な茨城の……。

【竹中】 梶山さんですか。

【浜田】 梶山静六だ。幹事長代理が加藤紘一で、僕が副幹で。僕が主に官邸とのやりとりをしていたわけ。その相方が中島だった。

だから、僕の10兆円提案プランも、あるいは中島を通じて提出して説明に行ったのかもしれない。党と官邸とのやりとりは、ほとんど僕と中島。それで加藤さんも時々加わっていたけれどね。加藤紘ちゃんね、宮澤が苦手なんです。宮澤という人は意地の悪い人でね、「おまえ、バカか」という顔をするわけだね。だから、大抵のやつはひるんじゃって、宮澤の前ではちゃんと議論できないんだよ。僕の知性のレベルが高いという意味じゃないけれど、図々しいんだよね、僕は。僕は何でも言うでしょう。だから、いきおい僕がパイプ役になっていたわけですよ。

宮澤政策は、さっき言ったように僕がたまたまシンクタンクをつくっていたし、そこに榊原（英資、当時は官房審議官。のちに財務官。現在青山学院大教授）とか野口（悠紀雄、当時は一橋大教授。現在は一橋大名誉教授、早大教授）とかいろいろな人が参加してくれていたよ。舛添（要一新党改革代表、参議院議員。元厚生労働大臣）だって。舛添なんてあの当時真面目な東大の助教授だったんだから。それがテレビに出て、クイズ人間か何かになっちゃって（笑）。そういう一級の人たちを集めて宮澤政策をずっと議論して、それを小沢君に取りまとめさせていたわけです。その連中は、宮澤総理になってからはほとんど外部ブレンミみたいなもので、時々僕が意見を聞くぐらいの話だったけれど、そういう活動を僕は病後も続けていました。

だから、10兆円提案も、正確に記憶していないけれど中島義雄は通しているかもしれない。それに彼流のいろいろな脚色もしているかもしれないし、宮澤も中島との間では、僕らの知らないいろいろな会話もしているから、今あなたのおっしゃった「取引所閉鎖説」

というのは、僕はちよつと関知していません。

【原田】 中島さんにもこれからお話を聞きには行くんですけれど。

【浜田】 うん、うん。中島も悪者にされちゃったけれど、大変優秀な男だ。

【原田】 セーラー万年筆の社長になられて、復活されているわけですからね。

【浜田】 あれは、稲盛〔和夫・京セラ創業者。現在は日本航空と日本航空インターナショナル会長〕さんが引つ張り上げてくれたんだよね〔京セラに入社〕。僕は非常によかったと思う。そのあと船井電機に行つて、今度は万年筆だったかな。

【原田】 セーラー万年筆ですね。

【浜田】 社長になったね。それだけの価値のある男ですよ。僕と彼はツーカーで、宮澤の癖も2人とも知り尽くしていて、まあ2人とも図々しいからね。税務署長も前任・後任で。あいつも遊び人でね〔笑〕。いい意味だよ、悪い意味じゃなくて。だから、あのときは、官邸はそれで一生懸命支えていたんだからね。

宮澤総理の真意

【原田】 宮澤さんがどこまで本気でその10兆円計画を考えておられたのか、という問題もありまして。

【浜田】 うーん、そこところなんだよ。

【原田】 別の方の証言によれば、本気ではなかったというのです。中山素平さん〔旧日本興業銀行頭取、経済同友会代表幹事など歴任〕から盛んに、不良債権は大変なことになるから、公的資金を注入し

ても解決しなければいけないと言われていた。だから、やっていくふりをせざるを得なくてやっていただけだ、という証言もありました。

【浜田】 まあねえ、あの人は、僕は角さんが好きだったの。新潟で税務署長もやったしね。政治家っていうのは、あまり頭が良くないほうがいいんですよ。小泉〔純一郎元首相〕なんかちょうどいいんだよね。郵政民営化なんて、大蔵官僚とか金融がわかつている連中にとつては当たり前の話でね。だって、郵便貯金を財政投融资で使っていたわけでしょう？大蔵省ビルの2階が主計局で、3階が理財局で財投をやっていたわけです。国有林の経営なんて成り立たないわけだよ。だから、普通の予算ベースには乗せられないの。僕も犯人の1人なんだけど、そういう筋の悪い話はみんな3階送りするわけです、融資だから。それで、郵便貯金はもうじゃばじゃばあるしね。だからダメなんだ。だから、僕は郵便貯金は無くすべきだと言う。もう役割は終わったんだから。まあ、それは余分な話だけれどもね〔笑〕。

だから、なぜ宮澤か、という話に戻ると、〔宮澤は〕親分じゃないんだよ。だけど、僕は〔宮澤の〕知性に蹴つつまずいたんだと思ってる。僕の青春の蹉跌みたいなものだね、本当。だって、岸〔信介元首相〕さんも可愛がつてくたさつて、岸邸で安倍晋太郎さん〔元外務、通産、農林大臣、内閣官房長官〕なんかに会うと、「ああ、この親分なら楽だろうな」なんて思った。こっちはさ、親分じゃないんだよ。僕が落選したつて、ふんでもないんだからね。普通は、派閥の親分は金をくれたりいろいろするじゃない。金はこっちで運んでいたぐらいだからね。

だから、まあ青春の蹉跎なんだけど、やっぱり彼の知性だよ。僕が政界で会った2大知性と言っているんだけど、1は岸信介。この人は大したものですよ。2番目が宮澤ね。両方とも相手のことをよく言わなかったけどね。

でも、宮澤が一つだけ岸さんを褒めたことがあるんです。僕が、「岸信介はあんなに英明な人なのに、なんでこの時期に自主憲法制定をあれだけ言い募るのか」と聞いたわけ。僕はその当時まだ甘かったから、今の憲法でいいみたいな議論をしていた時代です。そうしたら宮澤がこう言ったよ。日本の戦後処理をやったのはみんな二線級の人物だと。吉田茂なんかそうなんだよ、外務省でも二線級だったんだから。

僕の家内のおじきが藤井実といって有名な外交官だったの。吉田茂と同期で、イタリヤ大使館で書記官が何かになっていた。日独伊枢軸に反対して、藤井実は外交官を辞めるわけよ（吉田と同じ1906年（明治39年）の高等文官試験に合格し外務省入省、1929年（昭和4年）フランス大使館参事官を最後に退官）。それ以来、おもての場に一切出てこなかった。僕は東大生の頃に、マキ子とは東大時代からつき合っていたから、そういう人に会わせろと言っておじきに会ったら、巨人だったね。

宮澤の言葉に戻ると、あの頃、第一線級の人物は、戦死するか、あるいは戦犯になってプリズンにいた。だから日本の戦後処理をやったのは二線級の人物だった、と言うんだよね。「二線級」という言い方をした。「二流」よりは品がいいよな。それを岸さんが果鴨から耐えられない気持ちで見ていた。あんなばかげた憲法は国家をダメにする。そういうのが岸さんの気持ちなんだよ、と僕に解説

してくれて、それは僕も、ああ、そうかということ鮮明に頭に残っているけどね。僕は知性がないせいか、知性に弱いんだよね（笑）。だから、岸さんが大好き。結局、宮澤さんに蹴つまずいちゃって、親分でもない人を総理にしちゃった。総理として宮澤は失敗ですよ。

ある財界人で僕に協力してくれる人が、宮澤を総理にするためには、まず中曽根との間を修復しなきゃいかん。宮澤は中曽根が大嫌いだから。金丸（信・元副総理、建設大臣）も大嫌い。「金丸なんか、簀巻きにして川に放り込め」と言ったとかね。だから僕がある経済人に頼んで、読売のナベツネ（渡邊恒雄、現在読売新聞グループ本社会長・主筆）とつないでもらった。ナベツネを口説けば中曽根に通じるわけですよ。ナベツネのほうも、「なんだ、あの野郎、似非平和主義者で」とか言うんだ。それで僕がいろいろ工夫して、「国連平和軍ならばいい」と（宮澤に）言わせたり、当時いろいろなことをやったわけですよ。

それで、いやがる宮澤を連れて行って、ついにナベツネに、「宮澤が本当にそれを公に言うならば俺も手伝う」と言わせたわけですよ。それで、宏池会の研修用に、国連平和軍構想も含めた宮澤演説を僕が小沢君に手伝わせて書いたわけですよ。それで、富士急の堀内（光雄会長、元通産、労働大臣、自民党総務会長）さんも当時は主戦論だったんだね。僕と堀内だけなんです、宮澤は今度出馬すべきたと言っていたのは。加藤紘一と邦さんは日和っていてダメなんだよね。

それで、御殿場かどこかの富士急のホテルで宏池会大会をやった。そのときに宮澤がその演説をするかどうか僕にとっては重大

だった。それでナベツネが動くかどうか決まるわけだから。そうしたら演説しないんだよ。ああ、ところがもうダメだなと思っていたら、演説を30分追加して、それをやったんだよ。それで僕は演説の途中で飛び出して、ナベツネに電話した。あの当時はまだ副社長で気さくだったからね。ナベツネに「宮澤は約束どおりちゃんと演説しましたよ」と。それでナベツネさんの仲介で中曽根とのパイプができた。

角さんを僕が口説こうと思ったけれど、角さんはダメだった。

「浜田な、それだけはダメ。あいつは総理になれない。ダメ」。だけど最後に言ったのは、「あいつは、幹事長も、政調会長も、総務会長も何にもやっていない。党務を知らないやつに総理はできない」と言うんだよね。それをそのまま宮澤に伝えた。そうしたら総務会長になったじゃない？だから、一つはやったわけだよね。

最終的に田中派（もう経世会になっていたけれど）とのパイプをつないでくれたのが、小渕恵三（元首相）なんです。僕は小渕さんと親しかったから、宮澤・小渕会談をひそかにセットして、僕が立ち会って3人でね。小渕さんが竹下さんというか、金丸さんを口説いて、経世会とのパイプをつくってくれた。そういう伏線があったから、小渕内閣のときに宮澤は大蔵大臣をやるでしょう。そうじゃなかったら、あの誇り高い男がね、総理を終わったあと大蔵大臣なんてやらないよ。

それで、しかもね、自分の話をしているようで申し訳ないんだけど、僕は、選挙が93年にあるわけです。軽井沢セミナーをやったのは92年でしよう。その頃は病身だったけれど、そのぐらいの活動はしていたわけだよね。93年の選挙で自民党は、今日は政治の話

じゃないから途中を省略するけれど、分裂するわけです。僕は副幹事長で打って出たわけだけれど、若い人を回っている間に、日本新党とさきがけにやられちゃってね。小沢鋭仁君を日本新党に推薦したのは僕なんだよね、細川（護熙元首相）さんと親しかったものだから。そうしたら、日本新党とさきがけが僕の選挙区にも（候補を）立てやがってさ。埼玉は、日本新党とさきがけは全員当選したよ。それで僕は落選するわけだよね。

落選したあと、駅前で「政策転換が遅い」という演説を盛んにやっていたから、93年に落選して、そのあと駅前で政策転換を訴えていたんだから、土地重課もまだ39%が外れていなかったしね。

【竹中】 そうでしようね。あと、地価税を凍結したということがあります。

【浜田】 もうなんだか忘れちゃったけれど、ともかく「政策転換が遅い」というのを盛んに演説していた記憶がある。

僕は浪人生活がだいぶ長くなったし、自民党は戻さないしね。いろいろなことがあって小選挙区制のときに、松永（光。元大蔵、通産、文部大臣）との確執で自民党を抜けるを得なかった。一番激しいのは自民党同士の争いなんです。それが全部、自民党県連の争いになったちゃっていて、絶対に公認しないわけですよ。それで、僕はやむをえず、無所属で出た。

それで、98年7月に無所属で。だから、この間、5年のブランクがあるんですね。参議院議員として無所属で返り咲いたわけです。それで、参議院議員としての処女質問をしました。無所属だから、公明党さんや自民党さんに頼んで、時間を少しずつもらった。30分ぐらいあったかな。予算委員会で質疑をやった。そのときは小渕総

理と宮澤大蔵大臣です（笑）。

途中いろいろなことがあったけれど、僕が自民党を抜けたものだから、小渕さんは「俺に相談もしないで」とかかんかに怒ってね。宮澤さんが僕に電話してきて、「スリーハンドレッド（クラブ）でゴルフをやるから、おまえも来い」と言うわけです。僕は浪人中、ゴルフなんてしたくないけれども行った。そうしたら小渕さんが来ていて、3人で回って、「おまえら、握手しろ」と言う。「浜田君、小渕さんに理解してもらえ」と。そういうところは、親分のあれはあったんだね（笑）。

そんな経過があつて、僕がリカバリーしたら宮澤大蔵大臣、小渕総理だった。それで僕の質問は、「宮澤大蔵大臣、あなたは公的資金注入を6年前にやると決意したでしょう。そのとき、10兆円だったでしょう」と。議事録を調べてもらえば出てくるけれどね。会派は、公明の時間をもらってやったんだ。

「あなたは6年前に公的資金注入を決意した。総理だったでしょう。どうしてできなかったんですか。しかも、あのとき僕らが言ったのは10兆円でしょう。それは僕らのラフな計算だから、もう少し費用はかかったかもしれない。でも、あのとき決断しておけば、今の300兆みたいなばかげた話にならないですんだはずでしょう」と。宮澤さんはにやにやしながら答弁するんだけど、隣で小渕が怒っているわけだ。「おまえ、親分に何を言うんだ」ということだけれど、無所属だからしょうがない（笑）。

~~~~~  
○浜田卓二郎君

（中略）

第一に私は宮澤大蔵大臣にお伺いをしたいわけですが、長銀処理に手間取ってまいりました。当初たしか、正確な言葉ではございせんけれども、大蔵大臣は、この長銀の処理を誤れば大変な事態になる、世界経済にとおっしゃったかどうかわかりませんが、大きな影響も及ぼすであろう、そしてこの処理をするためにはどうしても公的資金の投入が必要である、そして住友信託との合併が必要である、そういう認識を吐露されておられたわけであります。

（中略）

○浜田卓二郎君 それに関連して、これから破綻前のいうか、健全化、早期是正のスキームが議論され、また早期成立を目指すということになるわけでありますけれども、資本注入、公的資金の注入というものをどう考えるか。これは金融機関が悪いことをしたから公的資金を入れて、そして罰しながらやるんだという発想だけではないと私は思うんです。

つまり、金融全体に対する不安感というのが高まっておつて、一つ一つの銀行の経営責任を超えて資本調達コストが高くなる、難しくなる、そういう状況があるわけでありますし、しかも、公的資金といってもこれは貸し付けですね。ですから、有利子資金である、有償資金であるというんです。健全性さえ確保できれば回収は可能だし、うまくいけばもうかるという話もあるわけですが、つまり即税金ではないわけであります。ですから、健全化スキームの入りをやたら厳しくするというのは、私は制度をつくって生かさないうことになる、そう思っております。

ですから、要は対象をしっかりと選別して、しかし、その選別をすることは大事ですけれども、そこにはやはり実行可能な形で公的資

金を入れていくことだというふうに思います。

この公的資金の入れ方についても、全く情報開示とそれから申し出という組み合わせだけでやれるのかどうか。そこも若干、例えば分類を行政の方でしてしまつて義務的に入れていくという方法もあるんじゃないか。

1998年10月6日参議院金融問題及び経済活性化に関する特別委員会(第5号)。10月15日、同委員会(10号)でも、同内容の質問あり

~~~~~

行政の責任

【浜田】 だから総括的に言えば、このバブルというのは、まず護送船団行政と言われた保護行政があつて、そして、その銀行の体質が非常に規制に弱い、逆に言えば、競争に慣れない体質であつた。競争すれば、競争の世界にいれば、本当に予定調和があるのかどうかわからないけれど、どの辺まで競争するのかという、ルールとは言わないまでもある程度の節度は生まれるはずであつた。だけどそれが日本の銀行にはでき上がっていなかった。つくられてこなかつた。それは保護行政の失敗であり責任ですよ。

そのうえに、超金融緩和策があつて、対ドル関係で始まつた話だから、ここは推測だけれどたぶんアメリカの政策への配慮があつて、そういう銀行に超金融緩和策の時期を長く過ごさせ過ぎちゃつた。その間にめちゃくちゃな融資が行われて、めちゃくちゃな資産

購入が行われた。つまりバブルが大きくなり過ぎた。それは行政の責任だと僕は思うんですよ。

今度はずぶすのが遅過ぎた。遅いですよ。だって、あれでしよう、39%の土地重課が撤廃されたのはずうつと後でしょう。僕が93年の選挙で落選して駅前で演説している頃、なぜ39%の土地重課をやめないんだ。今は土地が動かないじゃないか、という演説をしてた。土地利用計画法の届出制もまだやめていない、というような記憶がありますね。

【竹中】 先ほどの、10兆円の日銀特融で不良債権を処理すればいいという浜田先生のご提案、政策提言をまとめられたとき、不良債権がたまっているということは、どういう形で(認識されたのでしょうか)。銀行経営者の方とお話しになつたりして、これはいいよまずいな、とお感じになられたということですか。

【浜田】 その辺の脈絡ははっきりしないけど、大橋さんがその後パイプ役になってくれたことから、政策集団を組織して、当時は、全銀協(全国銀行協会)も、証券業協会も、各証券会社も、政治家に比較的资金を出していたからそのシンクタンクを持つことができたわけで、当然、証券界にも金融界にもパイプがあつて、一緒に議論する機会がたくさんあつたんだと思うね。だからそういうところで、これは資産価値の下落で銀行はもうにっちもさっちもいかん、というような議論が出発点になつていっているわけですよ。

宏池会と長銀・日債銀

【竹中】 その関連で、今日の事前の質問にはなかつたことですが、

このあと日本長期信用銀行が破綻する話も、バブルの崩壊に関してもしくは、池田勇人さんがその創設に非常にかかわったこともあって宏池会は、深い関係があったと巷では言われていますが、その辺は何か印象に残っていることはありますか。

【浜田】 長銀とのかかわりについては、僕は全く記憶がありません。ただ、日債銀はね、日銀から東郷（重興。元国際金融局長。旧日債銀頭取などを経て現在はダイゾー（旧大阪造船所）社長）という人が……今もつきあいがあるけれど……経営立て直しに派遣されて、その前から国税庁長官を終わった窪田（弘。旧日債銀頭取・会長）さんが行っていた。窪田さんは当時からもさいたま市に住んでるんです。それで、須原屋という本屋に僕も本を買いに行くのと、彼とたまに会ったりするんです。大先輩だけれど可愛がっていただけていました。窪田さんが「まさか私まで来ないだろうけれど、様子がおかしいんですよ」と言って、何かで電話で話した2、3日後に逮捕されちゃったものだから、非常に印象に残っているけども。日債銀の立て直しには人を入れてるわけですね。長銀には入れていないんじゃない？

【竹中】 入れています。

【浜田】 ねえ。だから、そういう意味では逆に、長銀ではなくて日債銀とは関係が深いのかなと僕は思ったりしていたけどね。

【竹中】 そうですか。

【浜田】 僕の周りは逮捕者ばかりですよ。もう刑務所の塀が低くてね（笑）。

公的資金をなぜ入れなかったのか（2）

【原田】 聞きそびれたことですが、10兆円を投入するという話が出たときに、いろいろな反対がありましたね。永野健日経連会長とか、石川六郎商工会頭とか、速水優経済同友会代表幹事も大反対で、頭取の首を取らないとそんなものは到底入れられない、という雰囲気になったと思います。宮澤さんは、そういう雰囲気があったからやめたのか、そもそも最初からやる気がなかったのか、どうだったのでしょうか。

【浜田】 （笑） ちょっと、それは僕としては、初めからやる気のないのに人の話を何だと思ってるんだ、と言いたくなるよね。僕は、あの人は非常に賢明な人だから、その必要性はわかっていたと思うよ。その必要性は十分にわかっていたと思う。

【竹中】 そうですね、わかっていたと思いますね。

【浜田】 ただ、総理としての資格がないと言ったら失礼だけれども、ね、自分で実行すればいいの。それだけの決断力がない。だから、基本的には政治家よりは評論家が向いているんだよ。言っているだけなら気が楽だもんね。

【原田】 総理が決断したことに役人が反対できるはずがないと一般に言われますが……。

【浜田】 でも、もうまさに経緯は……。だから、ちょっと調べてみて。大橋さんにインタビューしてみると面白いかもしれないよ。

【竹中】 総理ご自身の説明ですと、自分は公的資金を入れたかったと。（ただ）宮澤さんが言われる公的資金は、日銀なのか、はたまた財政投融资なのか、はたまた、それこそ予算なのかはわかりませ

んが。当時の大蔵省は「金融行政の当面の運営方針」というものを出したいと言ってきた。それには別に公的資金の話は全く入っておらず、益出しするなとかそういう話だった。そういう紙を持ってきて自分を説得したので、自分はそれ以上何も言えなかったということと言っているようです。

【浜田】 何も言えなかった、というのはおかしいと僕は思うんだけどね。しかし大橋さんの説明では、僕の記憶では、大蔵省にやられたと。

【竹中】 当時、大蔵省は公的資金は入れたくないという方針を、対処方針としてまとめていたことは間違いないようです。

【浜田】 だけど、それはやっぱり責任追及だよ。大橋さんもそう言っていたな。「なんで？」と言ったら、「いや、責任追及が始まるからですよ」と。

【原田】 それは責任追及せざるを得ないですね。刑事的な問題ではないけれども、経営責任は追及されますよね。

【浜田】 責任追求は当然ありますよね。だって、あの窪田氏だって、救済のために日債銀に入って逮捕されるんだからね。東郷さんもそうだけれど。だってあの状況の中でね、不正融資とか背任とかそんなことを一々事件化できっこないよね。国民みんな、頭がおかしくなっていたんだからね。

さっきの阿戸さんの話だって、常識で考えたら(考えられない)。「あんた年収幾らなの？」って聞いたら、はっきり覚えていないけれど、たかだか10億あればどうかいほうの話なんだから。それが200億借りて、株とゴルフ会員権、主として株に投資している。だから僕はよく言うんだけど、バブル崩壊後に減った資産の下がり

率を考えてみると。一番下がったのはゴルフ会員権。何故かという、それは偽札と一緒にだから、いくらだって刷れるわけでしょう。

それをまた銀行の支店長が持ち歩いているわけだから、もうむちゃくちゃだよ。だから偽札をいくら刷っても、真面目に支店長が持ち歩いてくれるという時代だから、本当に頭がおかしくなっていたんですよ。そうでしょう。だから、一番下がり率が多いのはゴルフ会員権。10分の1ですよ。今も民事再生をやると、会員権の配当率は3%あればいいからだね。

その次にでかいのは、やっぱり株だよ。3万9000円まで行ったのが7000円ぐらいまで落ちたでしょう。株だよ。

まあ、3分の1か4分の1で下げどまったのは土地だよ。今まで全部土地本位制で日本はやってきたわけだからね。それでも3分の1か4分の1に下がったということでしょう。

だから本当に頭がおかしくなっていたんです。ゴルフ会員権が何物かというのをわからずにやっていたわけです。だって、あんなもの、何のルールもないんだもんね。わずかな土地で、すさまじい数の会員権を(発行できる)。輪転機を回せば、どんどん会員権を刷れるわけだ。それを支店長が売って歩いてくれるんだからね。頭がおかしくなきゃできないよ、それは絶対に。

だから、一概に誰が悪いと言えないんだよ。やっぱり思いついて、経済はずっと上昇すると思いついてた。そういうところに、たまたまプラザ合意があって、超金融緩和策があって、その主役として踊ったのが、長年の保護行政で骨抜きにされた、競争のルールも知らない銀行だった。ただ、その犠牲は全部払ったよね。大蔵省が分解されて財務省になって、証券局と銀行局が金融

庁になった。金融庁のビルのほうが本省のビルより……。」「おまえら、一番焼け太りだ」と僕は金融庁に言うんです（笑）。「元は4階の片隅にあつて、せいぜいティッシュペーパーの勘定をしていたんだぞ」と言つて。

同時に、対外競争力を銀行は全く失つたですよ。失つたというよりも、養つてこなかつたんだね。つまり、国内で金融の本当の意味の価格競争というのはなかつたし、大蔵省の役人を一生懸命接待していればなんとか生きていけたし、ということでしょう。

だから、大和銀行が何かでニューヨークでやられたのがあつたよね（95年9月に発覚したニューヨーク支店巨額損失事件）。デリバティブって言葉は、あの頃始まつたわけだけれど。要するに、支店長には競争という意識もないし、英語もできないし、部下が何をやっているかわからないというんだから。そういうのが支店長だから。だから、日本の銀行は今ほとんど国際金融マーケットから撤退しているんじゃないの？能力なしだよ。

総合政策の欠如

【原田】 地価や株価が下がったことが、不良債権の額が大きくなつてしまつた大きな原因だと思いますが、そのとき、もっと早めに金融緩和をしていれば、こんなに物価も下がらず、物価が下がらなければ、名目GDPも増えて、名目GDPが増えれば、資産価格もここまで下がらなかつた。総量規制を早くやめることも大事でしたが、金融の引き締めも早くやめて金融緩和すれば、不良債権ももう少し少なくて済んだのではないか。そういう議論はありませんでし

たか。

【浜田】 僕はしていたけれどね（笑）。人がどう議論したかよくわからないけれど、僕なんか、まさにそう思っていましたよ。だから、バブルというのは、バブルを大きくし過ぎたのも政策転換の遅れだし、つぶし過ぎたのも政策転換の遅れだしね。だから、これはもう本当に行政によつて国民は迷惑を受けたんですよ、このバブルの経験というのはね。

だから、まあねえ、罪は深いよね。特に銀行行政なんてのは罪が深いですよ。銀行をああいふうにしちゃつたんだから。普通の常識だつたら、支店長がいくらでも印刷できるゴルフ会員権を売り歩くわけないよね。しかも、金融付きで売り歩くんだからね。

だから、あらゆる行政のツケがバブルという形ででてきたんだな。政策判断をどこがするのか。僕は象徴的に感ずるんだけど、なんで宮澤は証券局長を言い、保田次官を言うか、そして、僕なんかにお使いさせるか、ということですよ。本来、経済企画庁がもつときちんとしたコントロール力をもつて、本当の経済の読みを政策に反映させる仕組みというものをつくるべきなんだけど、結局、（コントロールしていたのは）大蔵省なんですよ。

僕も主計局で主査をやつて、いい気分を味わつてきたわけだから……まあ、徹夜徹夜でしんどかつたけど……あまり悪口を言いたくないけれど、やっぱり日本の官庁というのは、大蔵省以外は、ほかの官庁に対するコントロール力というのは、そういうものを發揮し得ないよね。だから、総合政策官庁みたいなものが……。本来経済企画庁がそれをやるべきだつたけれど、経済企画庁の発言力なんかほとんどなかつたもんね。

【原田】役人は、しょせんは単なるスタッフなわけですから、その上の大臣と総理が一体となってどうするべきかを考えるしかないと思うのです。役人は、本来は、材料を提供するための存在でしかないわけです。

【浜田】非常に難しいところですよ。僕は予算をやっているにつくづく思ったけれど、これぐらい縦割りの激しい組織もないしね。それぞれにみんな利益団体とか国会議員なんかがついているから。例えば僕が公共事業でやっていたとき、海の予算と山の予算のシェアがちよっとでも、0・何%動いても大騒ぎになっちゃうわけだよ。だから、必要性から積み上げるのではなくて、過去どういうシェアで来て、それをどう変えないかが、各省庁の一番の権威争い、権限争いみたいになっている。それに応援団がくつついてというのが、今までの自民党政治の構造です。

だから、そういう意味でそれをいろいろな形でぶっ壊そうという民主党はいいと思うのよ。だけど一朝一夕でぶっ壊せるわけがないんだよ。僕なんかもドンキホーテだったとつくづく思うけれども、35歳のときに、このままではダメだと。年金の破綻なんていうのはとうにわかっていた。人口推計統計を見れば、このままで国民年金なんか続くわけがないと30〜40年前にわかっているわけだから。だから、僕は年金改革。保険料なんか集められっこないんだ。それに代わる財源として、消費税というのを僕は初めから主張して戦ってきたわけだけれど、そんなものが通じるような選挙じゃないものね。

僕が一般消費税賛成で演説していたら、今でも覚えているよ、下条〔進一郎〕さんという大蔵省の先輩が参議院議員でいて（大蔵省

時代は日銀政策委員など歴任。元厚生大臣）、いい人だけれどね、「浜田君、おまえはバカか。選挙で税金の話をしたらいかん」と言うんだよ（笑）。

税金の話

【浜田】僕の最後の質疑は、予算委員会だったか、財政金融委員会だったか、（財務大臣の）塩爺（塩川正十郎、元運輸、自治、文部大臣、内閣官房長官、自民党総務会長。現在東洋大総長）にやったんだ。僕は（埼玉県）知事選を最後に戦って辞めちゃったんだけど。自民党が戻さないから。無所属で参議院議員をやったって、何の意味もないからね。だから辞めて知事選に出て、知事になって自民党に迂回しようとしたわけだよ。それで知事選に立候補の声明を出したら、自民党のバカが対立候補を出すわけだよ。僕に乗れば勝てるのに。それで、民主党の上田に知事を取られちゃって、今は埼玉県は上田〔清司〕知事です。ああ、そんなのは速記しないでね（笑）。

最後に塩爺に、最後っぺの質疑をした。「あなたは財務大臣はこういう役割が知っていますか。国の金庫番でしょう。あなたは金庫を開けたことがあるの？」と聞いたんだよ。『紙くずだらけじゃないか。お金が全然入っていないじゃないか。そういうのは無責任だ』と言ったら、爺さんが怒ってね。僕が質疑しているのに、「はい、はい、はい」と手を挙げて、委員長制止を振り切って立ち上がって、「いくら浜田委員の見識があるといえども、無責任とは何事だ」と。ああ、しめたと思って、「無責任でしょう。あなたは金

庫を開けたことはないんでしょ」と言った。

今年の予算なんて、あなた、国債のほうが多いんだぜ。正気じゃないよねえ。だって、僕らが大蔵省に入った頃、「英国病」という言葉が流行っていたし、イタリアという国家は破綻している。国家の破綻というのも意味がよくわからないんだけど。アメリカなんて、とうに破綻しているよね。そうでしょう、中国と日本に国債を買ってもらって生きているんだから。日本はまだしもさ、家計資産が1500兆あるでしょう。国債は1500兆の中におさまっているのよ。だから、僕はおさまっている間に徐々に借金を税に変えていく(べきだ)。その時間的余裕がだんだんなくなるぞと言っているんだけど、もう国会の中ではたぶん、税金について議論するやつは誰一人もないんじゃないかな。

【原田】 今、消費税の議論が……。

【浜田】 始まっている？

【原田】 始まっているというか、始めてはいないのですがいざれ始めようと議論している……。

【浜田】 委員会の質疑の中でともに税を取り上げているやつは、いいはずだよ。共産党だってその点を取り上げないからね。だから、僕がいなくなつて、財政金融委員会で税の議論をきちんとするやつは誰もいないんじゃないかな。まあしょうがない、僕はあまり長生きしないから、あとはどうにでもなれと。やれるだけやつたし、言うだけ言つたという気持ちはあるんだけどね。だけど、いざ稼ぎ出すと、税金は高いよ(笑)。

【原田】 限界税率は地方税を入れると5割ですから、高いですね。

【浜田】 政治とかなんかの話はもう一切しないで、全部お断りして

いるんだけど、今日は久しぶりに。一度、こういうことは語っておいたほうがいいんじゃないかなと思ってね。これからの日本の国家をどうするかだよ。僕なんかもういい年になっているから、あまり考えないで済むのはハッピーだと思っけどもね。ただ、ほかの国に比べれば、時間はまだあるんだよね。アメリカはもう垂れ流しもいいところで、預貯金はないしね。貯蓄率なんていうのはほとんどないでしょう。

【原田】 今、不況でプラスになって、一時8%ぐらいになりました。

【浜田】 ああ、貯蓄率があつたの。

【原田】 不況になって、8%ぐらいまで上がったって、今はむしろ日本のほうが低いです。日本が家計貯蓄率は3%に下がってます。

【浜田】 ああ、もう下がっちゃったんだね。だから、ますます時間がなくなるよね。家計資産の中におさまっている間に、借金を税金に徐々に置き換えていくべきだよ。急にと言つたつて無理だけど。それに、公平性とかいろいろな点から見ても、消費税が一番なんです。所得を貯めきつた金持ちの年輩者からも税として取れるのは消費税だしね。だから、国民年金を消費税でやらなきゃね。今は4割とか何とか払っていないわけでしょう。これは完全な破綻だよ。ね。そんなことは30年も前からわかっているわけだね。

だから、僕も演説だけで最後まで実現していない話はいっぱいあるから、そういう面では忤怩たるものがあるけれども。まあね、僕の生きている間ぐらい日本はもつだろうと。無責任なことを言っているから、これも削除ね(笑)。

借地借家法の改正について

【原田】最後にちよつと細かい話になりますが、借地借家法の改正で土地取引が流動化すれば、バブルの後始末にもいいと発言されています。あまり効果がないとおっしゃっていましたが、定期借地権付きの物件とかが結構販売されて、それなりの効果はあるような気がします。今はいかがが評価されていますか。

【浜田】やっぱり立場立場で、誰のために物を言うか、みたいなところがあるんです。弁護士の言え、やっぱり借地借家法によって守られている人たちがたくさんいるんだよね。それと同時に、何も大地主に自由自在に借地借家人を追いつけるような制度にしないで、少しは……。だけど、今はちよつときつ過ぎるよね。例えば立ち退きで、裁判所で正当事由がなければだめだと言うんですよ。つまり、正当事由というのがなければ立ち退かなくてもいいわけだよ。そうすると、正当事由が何かというのは、ケースケースで争ってみたいとわからないわけ。

僕のところに来るおじいちゃん、おばあちゃんも、解決して結局出たけれどね、家が崩れそうで危険なんだよね。「あなた、地震が来たらつぶれるよ。今出れば、地主さんが引越料ぐらい出してくれらんだから今出なさい」と言った。それでこのあいだ出て、たまたまなんでしょうけれど、都営かなんかに入れた老人夫妻がいたけれどね。

ただ、居座るやつがいるからね。特にこういうふうな（頬に筋を示して）感じで居座られたら、手の出しようがないんだよね。そういう意味では、もう少し緩和してもいい、正当事由というか退出し

てもらう理由というのを拡大してもいいような気は、今でもしていますけどね。

【原田】大阪などでは、特にそういう問題（頬に傷）で処理が遅れたというような話がありますね。

【浜田】今度は逆に、立ち退きのためにいろいろな嫌がらせをしたり、似非同和とか。同和というのも大変なものです。予算でやるとね。僕も駆け出しの主査の頃、同和对策予算も担当させられたけれど。上田（卓三）っていたら。部落解放同盟の委員長で、あと、衆議院議員をやつてね（旧社会党。副委員長など歴任）。僕らが若手の頃だから、彼ももう老人だけれども（05年5月26日死去）。

予算折衝のときに、あいつが後ろからバーツと駆けてくる。予算折衝といつても、大衆団交だよ。主査を吊るし上げるわけだ。そうすると、青年部長の上田が上からタタタッと走って来て、腕時計を外して、人の机にバーンと叩きつけて壊すんだよ。後で聞いたら、安い時計なんだ。ああいうのにはびこられると大変だよ。

だから、借地借家法なんていうのは、使い方によってはそういう人たちの稼ぎの材料にもなっちゃうしね。そうすると、地主とは何だ、というの、昔はもつとありましたからね。だからもう少し緩和してもいいという考えは、今でも変わりませんね。

また足らなかつたら、いつでも個別にでも結構です。久しぶりに昔のことを（笑）。

【原田】宮澤総理のお話とか、岸さんのお話とか、非常に面白い話を聞かせていただきました。

古き良き時代の政治家

【竹中】 小淵さんがつないでくれたというのは、いつ頃の話ですか。

【浜田】 宮澤内閣誕生の直前だよ。だから、宮澤出馬演説をするための基盤整備を、僕は一所懸命やっていたわけだね。ほかにも動いていた人がいるけどね。例えば堤さんの弟のほう。

【竹中】 義明さん（元西武鉄道グループ・オーナー）。

【浜田】 義明さんは弟か。それなら兄貴のほう、清二さん（元セゾングループ・オーナー）だ。これは面白んだよね。堤清二さんは、今、日テレの会長をやっている氏家（齋一郎）さんと一緒に動いていたよ。僕は、ナベツネさんをつかまえて一生懸命やっていたけどね。ナベツネさんはやつぱりオピニオンリーダーというか、ある種の発言力が本当にあるんだね。やつぱり通すべきところを通して。だから宮澤みたいな人は、よほど周りが動いてあげないと総理になれなかったね。だけど、総理には向いていなかったね。失敗というよりも、もともと向いていないんだよね。評論家になったらすばらしく優秀な人だらうけどね。

【原田】 宮澤さんも「郵政民営化なんかできるはずないじゃないか」とかおっしゃっていましたね。

【浜田】 郵政民営化というのは、大蔵省とか知識人の間では、金融がわかるところにいる人の間では、常識なんですよね。だけど選挙の中で、これも神話なんだけれど、特定郵便局長の力が強いと。（本当は）そんなに強くないんですよ。ただ、やつぱり黙っている有権者よりも、具体的に動く有権者のほうがアピールの度合いが強いわけよね。そうすると、特定郵便局長なんていうのは上手だから、大会を開いて推薦をしてやるわけですよ。そうするとその主張に逆らえない、と思ひ込んでいくわけ。

だけど、埼玉の郵便局長会は、僕が民営化論をぶつても、みんな僕を応援してくれたよ。僕がいなくなると片方が演説するんだけど、そっちは「絶対に民営化させない」と言って頑張るわけだけど、みんな、そんなことはできっこないと思っているからね。「民営化はできっこない」と思っていた時期がずうっとあったわけですよ、そういう自民党伝説みたいな中でね。

だけど、政治家というのは、あらゆることがわかっていて、そのバランスなんかわかっていたらかえっていい政策はとれないと思う。だから小泉のように、バカの一つ覚えで民営化が言えるというのは貴重な存在よ。

【原田】 小泉さんは、郵政が持つて来る票はあるけれど、それで逃げる票もあるし、民営化を訴えることによって来る票もあるんだとおっしゃっていました。そこに気がついている人こそが本当の知性を持つている人であって……。

【浜田】 まあそれはそうだ。

【原田】 宮澤さんのように古い知識がいっぱいあるというのは、知性なのかなと思ったのですが。

【浜田】 それは定義の問題でしょうね。

【原田】 だから、戦犯が優秀な人だったというのも、それはそのなかでしようけれど、それはそのときの知識を持っていただけであって、本当の知性ではないのではないかと思ったのです。

【浜田】 まあ宮澤なんていうのは、本当の古き良き時代の知性人で

しょうね。

【原田】 漢籍とかにもお詳しくて、字も達筆だし。

【浜田】 もう小唄なんか名人だよ。知らないでしょう。あの人の酒癖が悪いというのはよく言われるけど。僕は、あまり酒癖が悪いとは思っていなかったね。一度、小渕さんと僕と3人で会を持ったあとに、小渕さんは昔からペースメーカーを埋めていたから、9時ぐらいになると帰っちゃうんですよ。普通だったらそこで僕らも帰るんだけど、宮澤と僕になった。「浜田君、久しぶりに歌おうか」と言うんだ。あれ、カラオケでもやるのかなと思ったら、三味線が出てきた。

小唄は、台があつて、そこに譜面を置いて、それをめくりながら唄うんですよ。めくっているんだよね。だけど視線を見ていると、全然見ていないわけ。全部そらんじているわけ。それがまあ朗々たる声でね。だから意外な趣味人ですよ。池田勇人〔元首相〕に仕込まれたの。池田勇人の秘書官が宮澤と大平。この2人は大猿の仲なんだよね、宮澤、大平というのはね。だから、大平派になったときも、宮澤さんは、「自分は宏池会だけでも、大平派ではない」と言った。

角さんも、小唄、端唄、俗曲の名人なのよ。僕は宮澤派だから、正月は、記者さんたちがいなくなつてから角さんに会いに行つたわけ。というのは、派閥というのはやくざの組と一緒にだから、「あつちで金をもらつて、こつちで金をもらつている」ぐらいの悪口はいっぱい言われるわけ。僕は、新潟の三条、その前の入省以来のおつきあいだから、角さんには遠慮なく可愛がついていただいた。ただし、お金はただの一銭ももらつたことない。だからつきあえるわけ

ですよ。

最後に会つたのが正月元日。記者が皆帰つて、角さんが母屋から出て来てくれて、僕ら夫婦と、田中直紀（現在民主党参議院議員）、眞紀子（現在民主党代議士、元外務大臣、科学技術庁長官）、まだ2人とも国会議員になつていなかった。それに中村メイコさん（女優）のご夫妻がいて。角さんと僕だけが2人でオールドバーを半分ぐらい飲んで、もういい機嫌でね、口三味線で、端唄、小唄、俗曲をいっぱいやるわけ。中村メイコの旦那は音楽家でしょう。神津善行さん（作曲家）。それで、ロッキードが終わつたら角さんのLPをつくろうと神津さんと約束したんだよね。その直後に倒れちゃつて、眞紀子さんにそれ以来角さんには一度も会わせてもらえなかったね。

ああいう昔の人は、意外なそういうお座敷芸みたいなものを身につけているんだよね。

【原田】 お座敷芸がうまかつたのは高杉晋作以来でしょうか。

【浜田】 まあ、しかし今やお座敷はもう壊滅状態よ。いい伝統なのか悪い伝統なのか知らないけど、日本的なものはどんどんなくなつていくね。